〔百練抄十六後深草〕寶治元年正月十七日辛未、今日關東若宮神前螻蟻數十万充滿、亥子時人々見付之、翌朝失畢之由、後日風聞、

建長三年五月十五日甲戌、權中納言通雅卿被行軒廊御卜、鴨社羽蟻出來事

〔吾妻鏡二十〕建暦二年十月廿日壬辰、午剋鶴岡上宮寶前、羽蟻飛散、不知幾千萬、

〔吾妻鏡三十一〕嘉禎二年四月一日丁亥、午剋鶴岡若宮、羽蟻群集、子剋地震、

〔康富記〕嘉吉三年四月廿日、又先日比、春日社へ御殿瑞籬内羽蟻立之由、社家有注進、永享八年有此事、仍來廿七日、可被發遣春日一社奉幣使之由、頭辨爲奉行、今日被仰清大外記云云、

〔重修本草綱目啓蒙二十七〕青腰蟲

青腰蟲

形蟻ヨリ、長クシテ、腰細カラズ、尾ハ直ニシテ尖リ、刺アリ、蟻尾ノ下ニ曲レルニ異ナリ、全身色赤ク、其腰綠色ニシテ光アリ、身長サ三四分、又一寸許ナル者アリ、稀ナリ、又全身黑色ニシテ、腰中黃赤色ナル者ハ甚多シ、春夏ノ交リ、朽木腐柱中ヨリ羽化シテ飛ビ出、甚ダ多キコト白蟻ニ異ナラズ、飛上ルコト高カラズシテ地ニ下リ行ク、ソノ四羽薄クシテ色白ク、身ヨリ長キコト白蟻ニ同ジ、地ニ下レバ卽羽ヲ脫シ去リ、數多連行スルコト蟻隊ノ如シ、腰中ニ又羽アリ、驚ク時ハ出テ飛ブ、地ニ下レバ羽ヲタヽミテ腰中ニ藏ス、

〔枕草子十〕ありどほしの明神、貫之が馬のわづらひけるに、此明神のやませ給ふとて、歌よみて奉りけんに、やめ給ひけんいとおかし、此ありどほしとつけたる心は、誠にやあらん、略○中もろこしの帝、この國のみかどをいかではかりて、此國うちとらんとて、常に心見あらがひ事をしてをくり給ひける、略○中七わだにわだかまりたる玉の中とをりて、左右に口あきたるが、ちいさきを奉りて、これにをとほしてたまはらん、此國にみなし侍る事なりとて奉りたるに、略○中おほきなるありを二つとらへて、こしにほそき糸をつけ、又それに今すこしふときをつけて、あなたの口に、

蟻事蹟